

講義年月日 2004年9月28日(火)

講演者 加藤好郎氏(慶應義塾大学三田メディアセンター事務長)

テーマ 図書館コンソーシアムとは:図書館のサービス充実に向けて

講義内容

1. 図書館コンソーシアムの歴史

アメリカの図書館コンソーシアムの歴史...1970年代情報のネットワーク化 書誌ユーティリティーの構築から
コンソーシアムの種類...電子ジャーナル購入目的、相互協力を目的とした地域コンソーシアム、レファレンス
事例データベース構築目的、デジタル化事業のための企業参加型 がある。

2. コンソーシアムを成立させる4つの必要条件

各参加図書館の事業目標を満足できる目標設定、コンソーシアムとして独立した組織構築、しっかりとした財
源の確保、専門職としての図書館員の確保 の4つが必要である。

3. アメリカにおけるコンソーシアムの事例...コンソーシアム誕生以前の歴史 ILL乱用への警鐘

4. ボストン図書館コンソーシアム

1970年設立。ボストンカレッジ、ボストン公共図書館等16機関で構成。但しハーバード大学は不参加。
事業内容として図書館員の育成のための研修や参加図書館間での異動がある。運営のための組織が独立。

5. トライアングル・リサーチ・ライブラリー・ネットワーク(TRLN)

1933年ノースカロライナ、デューク大学2校からスタート。(最初は書誌の共有が目的)
単独図書館より利用者の利便性など多くの利益が得られる 現在ほどの図書館も自館だけでは運営が困難。
また運営組織が独立していることにより単体としてのライセンス契約やトータルシステムも構築可能。
資金は参加費、基金、外部資金、サービスに対する料金の徴収等。

6. 何故コンソーシアムが組みにくいのか

大規模図書館と小規模図書館の間での互恵の弊害 互恵ではなく持っている大学が貸し出す時代。
変化に対する抵抗、NHI症候群、資源と期待値の相違、妥協できない狭い心、組織背景と文化の違い、独自性(特
徴)と競合の矛盾、グローバルな視点での地域主義

7. コンソーシアム成功のための考え方

図書館同士だけではなく大学経営者同士レベルでの取組みが必要。

8. International Coalition of Library Consortia(ICOLC)

1997年活動開始。2000年は世界150のコンソーシアムが参加(日本からは国立大学図書館協会のみ参加)
2001年版声明...多様な価格設定と購入モデル(印刷ベースから電子媒体ベースへ)。電子ジャーナル利用便の向
上。長期的アクセス保証とアーカイビング。

ICOLCの政策展開...資料収集・資料組織化・資料提供・資料保存・図書館運営・基盤整備

9. 図書館コンソーシアムが望んでいるビジネスモデル

「印刷体プラス」から「電子版プラス」へ 教員への電子媒体への啓蒙活動が必要。キャンセル禁止条項排除。

10. SPARC(Scholarly Publishing and Resource Coalition)...ARLの高騰する学術雑誌への対応策

11. SPARC JAPAN...国立大学図書館協会(協議会)電子ジャーナルに対するタスクフォース

12. PULC(Private University Library Consortia)...SPARC JAPANの影響を受けて始まった

13. 教育研究情報購入機構...目的:補助金の獲得と管理(監査対象)

14. 最後に

ICOLCからJCOLCへ...JCOLCの立上げ 国公立大学図書館をシャッフルした新たなコンソーシアムの立上げ
内容:電子媒体の購入、相互協力(ILL,分担収集)

近い将来:図書館員の育成・養成のコンソーシアム構築、公共図書館とのリンク